

平成 22 年 6 月 28 日現在

研究種目：基盤研究（B）  
 研究期間：2007～2009  
 課題番号：19320039  
 研究課題名（和文） パロディと日本文化  
 研究課題名（英文） Parody and Japanese Culture  
 研究代表者  
 クリステワ ツベタナ（KRISTEVA TZVETANA）  
 国際基督教大学・教養学部・教授  
 研究者番号：80365519

## 研究成果の概要（和文）：

本研究の成果を大きく次の三つに分けることができる。すなわち、

1. パロディといういまだほとんど取り上げられていないテーマに焦点を合わせて、テーマの意義を証明し、研究方法を示したこと；
2. 日本文化におけるパロディのあらゆる可能性を分析することによって、すでにパロディとして取り扱われている作品やジャンルなどについて確認した上、いまだパロディと見なされていないが、パロディとして捉えるべき作品やジャンルについて指摘したこと；
3. 日本文化の発展におけるパロディの働きと役割の考察を通じて、意味生成過程のパターン、引用行為のメカニズム、文化的伝統の伝達など、日本文化の特徴に着目したことである。

## 研究成果の概要（英文）：

The major results of this research project can be summed up as follows:

1. By focusing on parody, a problem which has not been given a due consideration until present, the project highlighted its importance, and worked out a research methodology;
2. By the analysis of various aspects and manifestations of parody in Japanese Culture the project succeeded in extending the boundaries of parody research: to the texts already acknowledged as parody it added new texts and genres which should be considered as parody, thus opening new horizons for academic research;
3. Through the analysis of the function and the role of parody in the development of Japanese Culture the project revealed some of the basic characteristics of Japanese Culture concerning the pattern of signification, the mechanism of quotation, and the transmission of cultural tradition.

## 交付決定額

(金額単位：円)

|        | 直接経費       | 間接経費      | 合計         |
|--------|------------|-----------|------------|
| 2007年度 | 4,200,000  | 1,260,000 | 5,460,000  |
| 2008年度 | 3,300,000  | 990,000   | 4,290,000  |
| 2009年度 | 5,300,000  | 1,590,000 | 6,890,000  |
| 年度     |            |           |            |
| 年度     |            |           |            |
| 総計     | 12,800,000 | 3,840,000 | 16,640,000 |

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・日本文学

キーワード：パロディ、日本文化、日本文学、日本美術、日本思想、伝統の定着と伝達、テクスト志向(表現志向)分化と文法志向(内容志向)文化、意味生成過程のパターン

## 1. 研究開始当初の背景

- (1) 日本文化におけるパロディは、個別の研究があったとはいえ、全面的に、それぞれのジャンルや時代の差異を超えて、共通の立場から取り上げられていなかった。また、個別研究のほとんどが江戸時代の文化や文学に集中していて、それ以前のパロディの出現に目を向けることがなかった。さらに、「もじり」、「ちゃかし」、「やつし」、「見立て」など、日本独特なパロディ形式が考察されていたのにもかかわらず、それらを、比較文化的、多分野的立場から分析し、パロディの一般理論と結び付けてみる試みはなかった。国内のみならず、海外の日本研究においても。
- (2) 研究プロジェクトが 2007 年 4 月からスタートする前に、チームのメンバーや主な課題の認識など、条件がすでに整えていた。そもそも、共同研究のきっかけとなったのは、国際基督教大学の比較文化学科(大学院生)が行った「パロディと日本文化」のリレー講座である。それぞれ異なる分野の教員によるパロディの分析において、興味深い共通点も相違点も見えてきたので、共同研究に意義があることを確認できた。さらに、2006 年の 11 月に国際基督教大学で「パロディと日本文化」の国際シンポジウムを開催し、科研プロジェクトの出発に当たって、当大学のアジア文化研究所紀要の特集を出した。

## 2. 研究の目的

1.2 の欄に簡単に素描したように、本プロジェクトはゼロからスタートしたわけではない。それは大きなプラスだったに違いないが、マイナス側面もあった。なかでも最も深刻な問題として思われたのは、それぞれ各自で始めた研究の努力を合わせて、共通の方向へ向かわせることである。だから、プロジェクトのスタート時点、まず研究の目的と研究方法について詳しく議論し、コンセンサスを得た。研究の目的は、次の三つに絞ることができる。すなわち、

- (1) 日本文化におけるパロディのテクスト(文学、美術などの作品)を徹底的に調べて、すでにパロディとして公認されたも

のにとどまらず、見落とされているパロディ・テクストの可能性を追究すること;

- (2) 先行研究を踏まえながら、個別研究を纏めて、パロディという共通の枠組みで関連づける。さらに、主として西洋の文化的実践を基にして成立したパロディ理論を、異文化のテクスト分析に応用できるために再考察すること;
- (3) 日本文化におけるパロディ・テクストの特徴と文化史上の役割の分析を通して、意味生成過程のパターン、引用行為のメカニズム、カノンやジャンル作りのプロセス、文学や美術などの異なる分野間の記号交換など、日本文化の特徴について現代の文化理論および比較文化研究の立場から再考察することである。

## 3. 研究の方法

研究対象の多様性を考慮した上、なるべくたくさん問題点が把握できるため、二つの異なる研究アプローチで分析を試みることにした。すなわち、

- (1) その一つは、deductive method (演繹的方法)である。つまり、パロディ理論を中心として現代の文化論や文学理論を使用して、パロディ作品登場の条件について分析し、結果を日本文化の発展の流れと合わせて、どの時代においてパロディの可能性が必然性に変わるかについて考察し、仮説をたてる。そこから、パロディ条件を充たすテクストについて吟味し、仮説を裏付ける証拠を探ること;
- (2) もう一つは、inductive method (帰納的方法)である。つまり、パロディとして公認されたテクストを詳しく分析し、それぞれの特徴の考察を通じて共通点と相違点を見分ける。そこから、日本文化におけるパロディの特徴について論じて、日本文化史におけるパロディの役割について纏めることである

## 4. 研究成果

研究成果について、次の二つに分けて纏めることにする。すなわち、具体的な研究活動と理論的結論という二つである。

- (1) 本プロジェクトの焦点となったのは、「パロディと日本文化」の二つの国際シンポジウムである。

- ① その一つは、2009年3月13-14日に、フランスのパスカル・クリオレ教授を始め、INALCOの協力を得て、パリの国際大学都市・日本館で行われた仏日シンポジウムである。ワーキングラングエッジは日本語だった。発表は、日本側から七人(科研メンバー五人と協力者二人)とフランス側から七人で、三つのセッションに分かれて行われ、各セッションのディスカッションの他、最後には総合ディスカッションも設けられた。このシンポジウムの最も大きな特徴は、テーマの多様性である。時代的にも、ジャンルのにも。中古から現代まで、文学作品から書やマンガまで。さらに、和文のみならず、漢文のテキストも取り上げられ、中国文化と朝鮮文化についての発表もあった。ついでに付け加えると、フランスにおける日本文化研究の極めて高いレベルに感激し、刺激も、具体的なアイデアももらった。シンポジウムの意義を簡単に次のように纏めることができる。すなわち、シンポジウムは、パロディが日本文化において遍在していることを顕示し、異なる分野、ジャンル、作品のパロディ作用に重要な共通点があり、それらの共通点が日本文化の特徴を促しているということを示した。
- ② 二つ目のシンポジウムは、2009年11月27-28日に国際基督教大学で開催された。十七の発表と総合ディスカッションというタイとスケジュールで、大変充実した研究フォーラムとなった。海外から、ハルオ・シラネ教授、ジョシュア・モストウ教授など、七人の研究者(アメリカから二人、フランスから二人、カナダ、中国、韓国から一人ずつ)と、国内からも竹村信治教授など、三人の研究者を招き、科研メンバー全員が発表者(メンバー六人と協力者一人)か司会者などとして参加した。このシンポジウムの最も大きな特徴は、理論的レベルの高さである。焦点になったのは、事前にシンポジウムの枠組みとして設定したパロディとカノン、パロディとメディア、パロディとアイデンティティという三つの大きなテーマである。また、研究発表の対象を中心としたのは、近世文化なのだが、普段パロディの研究において取り扱われていない中古と中世の文化に関しても三つずつの発表があったことは、成功の一つと見なされる。総合ディスカッションは、本当の意味で brain-storming となり、予定していた時間を越えて、二時間にも及んだ。ICUのアジア文化研究所の協力を得て、シンポジウムの発表やディスカッション録音だけでなく、撮影

もしたので、データとして保存できた。

③ 科研予算外なのだが、二つのシンポジウムの発表が印刷されることになっている。パリシンポジウムの発表を中心に、ICUのアジア文化研究所紀要の「パロディ」の特集を出すことになっていて、出版予定は、今年の七月である。一方、ICUで行われた総括的なシンポジウムの発表は、論文集の本として出版される予定である。出版社がすでに決まっている。

- (2) 以下は、二つの国際シンポジウムを中心として、本プロジェクトの研究を通じて見えてきた問題について、要点に絞って紹介する。主として西洋の文化的実践を基にして成り立つパロディの理論には、異文化の分析に応用した場合、限界がある。しかし一方、もじり、やつし、ちゃかし、みたてなど、日本文化における多様なパロディ形式を関連づけるため、やはりパロディという総合の枠組みを使うしかない。この矛盾を乗り越えるため、パロディ理論を adopt する(そのまま応用する)のではなく、adapt する(考え直す)必要がある。本プロジェクトは、スタート時点で提起したこの問題意識を確認できた上、日本文化におけるパロディの特徴とパロディ研究の論争点について次のように纏めた。

A. 日本文化におけるパロディの特徴:

- ① 西洋文化におけるパロディは、主として内容のレベルで取り上げられている。一方、日本文化の場合、「もじり」などが示しているように、表現志向のパロディ形式の定着とその役割は極めて大きい。それは、テキスト志向(表現志向)の文化としての近代以前の日本文化の特徴を促し、意味作用のメカニズムを顕示している。
- ② 近代以前の日本文化は、外に対して比較的に閉ざされていた代わりに、その内なる空間は開かれている。そこからパロディの二つの大きな特徴が発生する。
- イ) 現代の文化理論は、引用行為を intertextuality(間テキスト性)の視点から取り上げ、テキストを引用モザイクと見なしている。パッチワークよりも、十二単に似ていて、積み重ねの結果である。だから、パロディは一対一ではなく、多数のテキストを含む連続的プロセスの特徴を持っている。
- ロ) 近代以前の日本文化の開かれた内なる空間においては、分野間の記号交換が活発に行われていたので、パロディは、同じ分野においてだけでなく、複数の分野(メディア)に及

ぶケースは極めて多い。確かに、こうした可能性は、パロディ理論によって指摘されているのだが、あくまで現代の文化に絞られている。一方、日本文化の場合、これは、近代以前のパロディの主な特徴の一つとなっている。

- ③ 西洋におけるパロディの主要な特徴は、社会的な役割である。一方、日本文化の場合、内容志向のパロディより表現志向のパロディの方が普及しているということもあって、社会的な役割は目立たない。代わりに、西洋文化にあまり見られない教育的な役割、文化伝統の伝達の役割が極めて強い。
- ④ パロディの可能性は、どの時代においても存在するのだが、しかし、その可能性がテキスト作りの必然的な条件の一つとなっている時代もある。これは、特にポスト源氏の王朝文学についていえることである。こうした視点から中世の王朝物語(いわゆる擬古物語)を取り上げると、文学史におけるその役割について考え直すことができる。

#### B. パロディ研究の論争点:

- ① 滑稽的な効果の是非とプロトテキストの問題

パロディ作品の滑稽的な効果の是非は、どのパロディ研究においても主要な問題の一つであり、研究者の意見が分かれている。本プロジェクトは、滑稽的な効果を必要としたのだが、しかし一方、近代以前のテキストに関しては、プロトテキストを確定し滑稽的な効果を把握できることは必ずしもできるわけではないということも強調した。したがって、パロディの研究をその効果に絞ることは望ましくない。

- ② パロディ作品のオリジナリティの問題と法律

パロディの定義があいまいからだろうか、現代におけるパロディ作品のオリジナリティの問題は極めて深刻になっている。パロディ作品の裁判のケースがすでにいくつかあって、いずれも、パロディ作品の負けで終わっている。この傾向が続くと、パロディ作品の可能性は法律的に消される恐れもある。

#### 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計 20 件)

- ① ツベタナ・クリステワ、「翻訳が促す日本古典文学の特徴」、「日本語テキストの歴史的軌跡・解釈・再コンテクスト化・布置」(名古屋大学)、2010、45-50、査読有り

- ② 小島康敬、「江戸期日本の中国認識」、『日中歴史共同研究第一期報告書』、外務省、2010、217-238、査読有り

- ③ Kenneth R. Robinson, 'Daoist Geographies in Three Korean Maps of the World,' *Journal of Daoist Studies*, vol. 3, 2010, 91-116, 査読有り

- ④ 小島康敬、「広瀬淡窓と丁茶山——『以心制心』『以礼制心』『以天制心』——」、第10回東アジア実学国際会議報告集『東アジア実学の意味と展開』、2009、321-334、査読有り

- ⑤ 古藤友子、「二宮尊徳与陽明学」(中国語)、『王学之旅』、王学之旅編集会編、貴州観族出版社、2009、268-274、査読有り

- ⑥ ツベタナ・クリステワ、「開かれた構造」と「月の影の世界」、『人間文化』人間文化研究機構、9巻、2009、46-50、査読有り

- ⑦ William Steele, 'Townsend Harris on the Art of Diplomacy,' 『アジア文化研究』国際基督教大学アジア文化研究所、35巻、2009、197-228、査読有り

- ⑧ Kenneth R. Robinson, 'Images of Japan in Four Korean World maps Compiled in the Fifteenth and Fourteenth Centuries,' 『アジア文化研究』国際基督教大学アジア文化研究所、35巻、2009、135-159、査読有り

- ⑨ 宮沢恵理子、「パロディとしての『のらくろ』」、『アジア文化研究』国際基督教大学アジア文化研究所、35巻、2009、347-361、査読有り

- ⑩ ツベタナ・クリステワ、「パロディ研究の可能性」、『中世文学』中世文学会、53巻、2008、1-5、査読有り

- ⑪ 小峯和明、「日本古典における〈食〉の登場」、『国文学解釈と鑑賞』、至文堂、別冊、2008、19-29、査読有り

- ⑫ 小峯和明、「東アジアの〈東西文学交流〉の可能性 - キリシタン・天王教文学を中心に」、『アジア遊学』勉誠出版、114巻、2008、6-17、査読有り

- ⑬ 小峯和明、「スペンサーコレクション・反町目録の再検証 - 総合目録作成のために」、『立教大学日本学研究所年報』、7巻、2008、1-8、査読有り

- ⑭ 小島康敬、「18世紀東アジア儒教思想史の中の徂徠学派と丁茶山・『以心制心』『以礼制心』『以天制心』」、『アジア文化研究』国際基督教大学、34巻、2008、43-59、査読有り

- ⑮ 小峯和明、「説話と狂言の表現空間」、『能と狂言』能楽学会編、ペリかん社、5巻、2007、1-13、査読有り

- ⑯ 小峯和明、「説話と説話文学の本質・東アジアの比較説話学へ」、『国文学・解釈と鑑賞』至文堂、2007、6-17、査読有り

- ⑰ 小峯和明、「〈法会文芸〉としての源氏供養

』、『源氏物語と和歌を学ぶ人のために』小島菜温子・加藤陸編、世界思想社、2007、239-256、査読有り

⑮小峯和明、「古典学の再構築をめざして・平安文学研究の内なる〈他者性〉」、『中古文学』、中古文学会、79巻、2007、13-22、査読有り

⑯Kojima, Yasunori, 'Islamic Thought and Neo Confucianism: Mapping Intellectual History: Zhu Xi, Wang Yang-ming, and the Sorai Schools as Seen in the Mirror of Islamic Thought,' Cairo Conference on Japan Studies, IRCJS, 2007, 157-172, 査読有り

⑰高崎恵、「描かれた自己像を読むとき」、『ソフィア』、55巻、2007、568-575、査読有り

[学会発表] (計 27 件)

①ツベタナ・クリステワ、「擬古の技巧——詩的カノンのパロディとしての中世王朝物語」、『パロディと日本文化』国際シンポジウム、2009年11月28日、国際基督教大学

②小峯和明、「物語再生装置としてのパロディ『平家物語』を軸に」、パロディと日本文化』国際シンポジウム、2009年11月27日、国際基督教大学

③ウィリアム・スティール、「明治初期の轉り——新旧メディアと『学問ノスゝメ』のパロディ」、『パロディと日本文化』国際シンポジウム、2009年11月28日、国際基督教大学

④小島康敬、「パロディ繚乱の江戸文化——『性』と『聖』とを繋ぐ笑い」、パロディと日本文化』国際シンポジウム、2009年11月27日、国際基督教大学

⑤古藤友子、「中国食文化にみるパロディ『仮(もどき)』料理管見」、『パロディと日本文化』国際シンポジウム、2009年11月28日、国際基督教大学

⑥高崎恵、「排耶書にみるパロディ性」、パロディと日本文化』国際シンポジウム、2009年11月27日、国際基督教大学

⑦Kojima, Yasunori, Hira Rosen: Late Tokugawa Folklorist from Tsugaru Domain; A View of Foundational Culture, Tokugawa Conference, 2009年3月23日, Selween, Cambridge College, UK

⑧ツベタナ・クリステワ、「パロディと日本文化」 「古き妻、新しき妻・平安時代のパロディ」(基調講演)、「パロディと日本文化」 仏日共同シンポジウム、2009年3月13日、パリ国際大学都市、日本館、フランス

⑨小峯和明、「お伽草子と狂言 - 料理・異類・争論」, 「パロディと日本文化」 仏日共同シンポジウム、2009年3月13日、パリ国際大学都市、日本館、フランス

⑩古藤友子、「パロディにみる中国文人官僚」, 「パロディと日本文化」 仏日共同シンポジウム、2009年3月14日、パリ国際大学都市、日本館、フランス

⑪ケネス・ロビンソン、「朴趾源の『兩班伝』に見える社会身分構造のパロディ」, 「パロディと日本文化」 仏日共同シンポジウム、2009年3月14日、パリ国際大学都市、日本館、フランス

⑫高崎恵、「隠れキリシタンの聖画にみるパロディ」, 「パロディと日本文化」 仏日共同シンポジウム、2009年3月13日、パリ国際大学都市、日本館、フランス

⑬宮沢恵理子、「パロディとしての『のらくろ』」, 「パロディと日本文化」 仏日共同シンポジウム、2009年3月13日、パリ国際大学都市、日本館、フランス

⑭ツベタナ・クリステワ、「私たち現代人にとつての『源氏物語』」, 源氏物語国際フォーラム、2008年11月1日、京都国立国際会館

⑮小島康敬、「乳井貢における実心美学 - 〈武門天命の職〉・〈公〉・〈私〉」, 第86回公共哲学京都フォーラム、2008年11月3日、神戸ポートピアホテル

⑯古藤友子、「石田梅岩における商心」, 第86回公共哲学京都フォーラム、2008年11月2日、神戸ポートピアホテル

⑰高崎恵、「秘密が作り出す社会関係: 五島カクレキリシタンの場合」, 「キリスト教文明とナショナリズム - 人類学的研究」, 2008年11月8日、国立民族学博物館、大阪

⑱ツベタナ・クリステワ、「日本語の表現力」, 「日本の文化と心II」 福岡ユネスコ国際セミナー、2008年10月23日、福岡ユネスコ

⑲Kenneth R. Robinson, The Choson Court and Japanese Impostor Muromachi Bakufu Officials, 韓国学中央研究院、2008年9月23日、韓国、ソウル

⑳小峯和明、「奈良絵本・絵巻の再解釈へ」, 奈良絵本・絵巻国際会議、CBL (チェスタービーティライブラリ)、2008年3月22日、アイルランド、ダブリン

㉑古藤友子、「善悪とその彼方・公共人間の内面的探求」, 第83回公共哲学京都フォーラム、2008年3月21日、京都リーガロイヤルホテル

㉒ Kenneth R. Robinson, "Korean Military Posts and Foreign Interaction, 1420s-1592," " 'Chungsim kwa chubyon' eso pon Tong Asia" (「中心と周辺」から見る東アジア) conference, Tongbuk A Yoksa Chaedan (The Northeast Asian History Foundation), 2007年12月10日-12日, Seoul, Republic of Korea

⑳高崎恵、「世界宗教とグローバル化」、国連大学グローバルセミナー第七回金沢セッション「グローバル文化と文化の多様性」、2007年11月23日、石川県青少年総合研修センター

㉑小島康敬、「18世紀東アジア儒教思想史の中の徂徠学派と丁茶山——『以心制心』『以礼制心』『以天制心』——」、18世紀東亜細亜儒教思想比較研究、2007年10月19日、中国武漢大学

㉒小島康敬、「『天道』と『人道』との交響・二宮尊徳の天地自然観」、「東亜思想史国際学研討會」、2007年8月9日、中国・東北師範大学

㉓ツベタナ・クリステワ、「『心のしるし』・古代日本文学における『心』の意味を問うて」、「日本の文化と心」福岡ユネスコ主催国際セミナー、2007年10月12日、福岡

㉔ツベタナ・クリステワ、中世文学におけるパロディ研究の可能性(「パロディ」シンポジウムのテーマ説明、司会と総括)、中世文学学会平成19年春季大会、2007年6月、国際基督教大学(ICU)

〔図書〕(計8件)

①小峯和明(共著(池宮正治と))、『古琉球をめぐる文学言説と資料学』、三弥井書店、2010、567頁。

②Kristeva, Tzvetana (共著), “Another Key to Tanizaki’s Eroticism, in “The Grand Old Man and the Great Tradition”, ed. by L. Bienati and A. Rupert, The University of Michigan Press, 2009, pp. 71-81

③ツベタナ・クリステワ(共著)、『源氏物語国際フォーラム集成』「〈月の影〉・私たち現代人にとっての『源氏物語』」、源氏物語千年紀委員会・角川学芸出版、2009、81-90頁。

④小峯和明、『中世法会文芸論』、笠間書院、2009、621頁。

⑤小峯和明(共著)、『源氏物語と江戸文化』(「お伽草子と説話世界の『源氏物語』」、森話社、2008、79-90頁。

⑥William Steele (共編), Japan and Russia: Three Centuries of Mutual Images, Global Oriental, 2008, 315 pages.

⑦Kenneth R. Robinson (共著), “Kojido soken tamgin Ilbon - Choson chisigin i chonyuhan Ilbon ui imiji (Japan in Historical Korean Maps: Images of Japan Held by Choson Korean Intellectuals).” In *Chong Tuhui and Yi Kyongsun*, eds. *Imjin Waeran - Tong Asia samguk chonjaeng*, Seoul: Hyumanistu, 2007, pp. 385-458.

⑧共編著書 小島孝之・小林真由美・小峯和明、『三宝絵を読む』、吉川弘文館、2007、

314頁。

〔産業財産権〕  
○出願状況(計0件)

○取得状況(計0件)

〔その他〕  
ホームページ等

## 6. 研究組織

### (1) 研究代表者

クリステワ ツベタナ (KRISTEVA TZVETANA)  
国際基督教大学・教養学部・教授  
研究者番号: 80365519

### (2) 研究分担者

小峯 和明 (KOMINE KAZUAKI)  
立教大学・文学部・教授  
研究者番号: 70127827

スティーラ ウィリアム (STEELE WILLIAM)  
国際基督教大学・教養学部・教授  
研究者番号: 00146747

小島 康敬 (KOJIMA YASUNORI)  
国際基督教大学・教養学部・教授  
研究者番号: 70101590

古藤 友子 (KOTO TOMOKO)  
国際基督教大学・教養学部・教授  
研究者番号: 90195751

ロビンソン ケネス (ROBINSON KENNETH)  
国際基督教大学・教養学部・上級准教授  
研究者番号: 10306904

宮沢 恵理子 (MIYAZAWA ERIKO)  
国際基督教大学・アジア文化研究所・研究員  
研究者番号: 50418901

高崎 恵 (TAKASAKI MEGUMI)  
国際基督教大学・アジア文化研究所・研究員  
研究者番号: 60418902

(3) 連携研究者  
なし